

村 長	副村長	課 長	係 長	課 員	担 当

報 告 書

項 目 蛇平・秋元・小野川地区 「みらいトーク！」 実施報告書

日 時 令和 8 年 7 月 30 日（木）18 時 30 分～20 時 00 分

場 所 蛇平集会所

事 務 局 総務企画課長、企画係長、穴戸、大内、佐藤（路）

出 席 者 5 名

1 目的

令和 9 年度から始まる第 6 次総合振興計画の策定に向け、蛇平・秋元・小野川地区の現状や将来への不安、残したいもの、10 年後に向けて必要な取組等について意見を聴取するため、蛇平・秋元・小野川地区「みらいトーク！」を実施した。

2 実施概要

はじめに、村から第 6 次総合振興計画の策定趣旨や計画骨子の考え方について説明した。その後、参加者及び村職員が自己紹介を行い、地区との関わりや日頃感じていることを共有した。

意見交換では、蛇平・秋元・小野川地区のビジョンマップを活用しながら、残したいもの、大切にしたいもの、心配なこと、今後あったらよいものなどについて話し合った。また、付箋を用いて意見を出し合い、地図上の場所や地区全体の課題・希望と結び付けながら整理した。

3 主な意見

(1) 子ども・世帯・事業者の減少と集落維持への不安

参加者からは、以前は地区内に多くの子どもがおり、一か所に集まって学校へ通っていたものの、現在は子どもの姿がほとんど見られなくなったとの話があった。

参加者の記憶では、かつては 27 人の子どもが集まって登校していた時期もあったが、現在は同じ場所から通う子どもがいない状況となっている。

小野川地区についても、現在の戸数は 9 軒程度であるとの参加者からの説明があり、今後さらに住民が減れば、集落としての活動や助け合いを維持できなくなるのではないかと不安が共有された。

蛇平地区では、以前は十数軒程度の民宿等が営業していたものの、現在は 1、2 軒程度まで減少しているとの話があった。宿泊事業者の減少は、地域の仕事だけでなく、観光客を受け入れ、地区に滞在してもらう力の低下にもつながっている。

一方で、長年地区外で生活した後、地域の人口を少しでも増やしたい、住みやすい場所にしたいとの思いから帰郷した住民もいる。

人口減少を前提としつつも、現在暮らす住民が安心して生活し、帰郷者や移住者を受け入れられる環境を整える必要がある。

(2) 若い世代がいても地域活動へつながらない背景

地区内には、30 代、40 代を含む若い世代が一定数暮らしているものの、祭り、消防団、行政区、地域の話し合い等へ参加する人は少ないとの意見があった。

若い人に地域への関心がないと単純に捉えるのではなく、村外へ通勤していること、仕事の休みと地域行事の日程が合わないこと、地域活動との接点が少ないこと等が背景にある。

地域内に家族の生活を支えられる仕事があれば、祭りや消防団等にも関わりやすくなるのではないかと意見もあった。

観光、宿泊、飲食、物販、施設管理等を組み合わせ、年間を通して働ける場所を増やす視点が必要である。

また、周辺のホテルや観光施設等で働く外国人住民が、花見や地域の催しへ参加しているとの話もあった。

外国人住民を地域の外側に置くのではなく、祭りや交流会等へ招き、地域の一員として関われる機会をつくる必要がある。

若い世代や外国人住民へ従来の活動への参加を一方的に求めるのではなく、現在の働き方や生活に合う日時、役割、参加方法へ見直すことが重要である。

（３）車を運転できない住民の買い物と移動

地区内には、車を持たない住民や、将来的に運転が難しくなることを不安に感じている住民がいる。

現在は移動販売が一部の世帯を巡回しているほか、近隣住民が車へ乗せ、買い物へ連れていく助け合いによって生活が支えられている。

以前の移動販売は、音楽を流しながら地区を巡回し、音が聞こえると住民が集まる仕組みとなっていた。買い物だけでなく、住民が顔を合わせる機会としての役割も持っていたとの話があった。

現在は、あらかじめ利用する世帯を中心に回っているため、誰が、いつ、どこで利用できるのか分かりにくく、地区全体で利用できる仕組みにはなっていないとの意見があった。

近隣住民による送迎についても、善意に支えられている一方、事故時の保険や責任等の問題があり、親切心だけに依存して続けることには限界がある。

公共交通、デマンド交通、地域内送迎、移動販売、宅配等を組み合わせ、車を運転できなくなっても買い物や通院ができる仕組みを検討する必要がある。

（４）観光客が地区を素通りする構造と立ち寄り拠点

地区には豊かな自然、涼しい気候、観光地への交通経路等がある一方、道路が整備され、移動が便利になったことで、観光客が地区内へ立ち寄らず、主要観光地へ直接移動するようになったとの意見が出された。

以前は蛇平地区の民宿等にも多くの宿泊客が訪れていたが、現在は地区内で泊まったり食事をしたりする必要がなくなり、地区を素通りする人が増えたとの実感が示された。

観光客が通過するだけでは、地域に所得や雇用は生まれにくい。現在訪れている人に、地区内で立ち止まり、

食べ、買い、体験し、宿泊してもらう必要がある。

地区内や周辺には、観光客や住民が気軽に食事や買い物をできる場所が少なく、手頃な価格で昼食をとれる店も限られているとの声があった。

意見交換では、既存の24時間利用可能なトイレや駐車場所等を生かし、道の駅のような立ち寄り拠点をつくってどうかという案が出された。

飲食、地域商品、農産物、観光案内、休憩、トイレ等を組み合わせることで、観光客が地区内で消費する場所となり、地域の雇用にもつながる可能性がある。

ただし、施設を整備するだけでは経営を続けることはできない。何を販売するのか、誰が運営するのか、通年でどの程度の利用が見込めるのかを一体的に考える必要がある。

地域ならではの食、商品、体験等、そこを目的に訪れたいと思わせる内容を育てることも重要である。

（５）磐梯山の眺望と電柱・電線等の景観

地区の魅力として、豊かな自然、澄んだ空気、夏の涼しさ、磐梯山を望む景観等が挙げられた。

蛇平地区には、坂道を進み、振り返ると磐梯山を大きく望むことのできる場所があり、住民が日常的に親しんでいる景観地点として紹介された。

一方で、写真を撮影しようとすると、電柱や電線が磐梯山の眺望を遮り、せっかくの景観を生かし切れていないとの意見があった。

また、一部の電柱については、傾いているように見えるとの指摘があり、景観だけでなく安全面からも状況を確認してほしいとの声があった。

電線の全面的な地中化には費用や積雪時の管理等の課題があるが、景観上重要な場所を選び、電柱や電線の配置、樹木管理、撮影地点の整備等を検討する余地がある。

景観は観光客のためだけでなく、住民が地域への愛着を持ち、移住者や事業者がこの地域で暮らし続けたいと思ううえでも重要な資源である。

（６）グリーンフィールド蛇平等の既存施設を使える状態にすること

グリーンフィールド蛇平について、広いグラウンド等があるにもかかわらず、十分に活用されていないとの意見が多く出された。

近隣住民であっても、どのような利用ができるのか、どこへ申し込めばよいのかが分からないとの声があった。

現在はグラウンドゴルフ等に利用されているものの、スポーツ合宿、サッカー、ソフトボール、キャンプ、ドッグラン、地域行事等、別の用途にも活用できるのではないかと案が出された。

過去にスポーツ利用を申し込んだ際、芝への影響等を理由に利用できなかったと聞いたとの発言もあった。現在の利用条件や実際の制限内容を確認し、必要以上に利用を狭めていないか検証する必要がある。

施設をきれいな状態で維持することだけを優先するのではなく、施設を利用して地域に人を呼び、交流や消費へつなげるという本来の目的を確認することが重要である。

利用上の制限がある場合には、その理由を含めて分かりやすく公開する必要がある。また、住民や利用者から活用案を募集してはどうかとの提案もあった。

五色沼周辺等にある長期間使われていない民間施設についても、地域では「もったいない」と感じられている。

（７）猿・熊対策、草刈り、除雪を支える仕組み

地区内では猿が日常的に見られ、畑で育てた野菜が食べられるなど、農作物への被害が発生している。

道路や住宅の近くでも猿を見かけることが増え、人を恐れなくなっているのではないかと不安が示された。

熊についても、観光地や散策路周辺での出没により、利用が制限された事例があり、住民生活と観光の双方へ影響している。

熊対策として草刈りや見通しの確保が必要である一方、自然公園内では、住民や事業者が自由に伐採や草刈りを行えない場所がある。

自然環境を保全することと、住民や観光客の安全を確保することを両立させるため、草刈り、情報提供、立入範囲等について、村、県、環境省、土地所有者、事業者の役割を整理する必要がある。

また、人口減少と高齢化が進む中で、草刈り、神社や道路周辺の管理、除雪等を、これまでどおり住民だけ

で続けることは難しくなっている。小野川地区では地域内の草刈り等を、ほぼ一人で担っている場所もあり、特定の住民へ負担が集中している状況が共有された。

住民からは、地域でできる作業は地域で行い、行政には機械、資材、安全講習、制度等の面で支援してほしいとの考えが示された。

刈払機については、安全な使い方を学ぶ講習を地区で行うことで、作業を担える人を増やせるのではないかと案が出された。

除雪については、小型のローダー等があれば、大型除雪車が入れない住宅周辺や細い通路を、時間のある住民が除雪できるとの提案があった。

機械の管理、整備、保険、事故時の責任等の課題はあるが、単純に実施困難とするのではなく、レンタル、リース、共同利用、作業者の登録等を含め、実現可能な方法を検討する必要がある。

住民の善意だけへ依存せず、地域で活動しようとする人を実行面から支える仕組みが求められている。

（８）祭り・花火を地域の交流へつなぎ直すこと

地区の祭りには山車があるものの、青年会等だけで運行することが難しくなっているとの意見があった。

太鼓や笛についても、教える人、習う人が減少し、技能の継承が途切れる可能性がある。

一方で、祭りは住民が顔を合わせ、地区外へ出た人が戻り、観光客も地域に関わることでできる重要な機会である。

宿泊客へ地域の祭りを案内したところ、予定を変更して参加し、楽しんでもらえたとの事例も紹介された。

祭りを従来どおりの方法で維持することだけを目的とせず、人が集まり、地域とのつながりを確認するという本来の機能を残す必要がある。

日程、準備、役割等を見直し、若い世代、学生、外国人住民、観光客等も参加できる形を検討することが求められている。

外国人住民については、既に花見等へ参加しているとの話があり、その人的なつながりを生かし、祭りや交流行事へ招いてはどうかとの提案があった。

外国人住民へ単に担い手を求めるのではなく、地域の食や文化を紹介し合い、住民と交流できる場として設計することが重要である。

(9) 地域の食文化を記録し、宿泊・観光へ生かすこと

北塩原村や裏磐梯を代表する料理が、住民にも来訪者にも分かりにくいとの意見があった。

地域で実際に食べられてきた家庭料理やおかずを住民から聞き取り、料理教室等を通じて記録してはどうかとの提案が出された。

具体例として、キノコを使った汁物を「キノコ山」と呼んでいたとの話が紹介された。

新しい名物を無理に作るのではなく、住民の記憶が失われる前に、実際に食べられてきたものを記録し、次の世代へ伝えることが重要である。

(10) 古くからの参詣道と小野川不動滝

地区周辺には、古くから多くの人が歩いた参詣道、石碑、鳥居、神社等が残されているとの話があった。

参加者からは、磐梯町の恵日寺方面から小野川不動滝、蛇平方面等を経由して歩かれた古道があり、現在も資料を調べて歩く人がいるとの説明があった。

地域の民家や神社関係者のもとには、参詣者に関係する札、板木、冊子等が残されているとの話もあった。

小野川不動滝については、不動をまつる祠と、目に関する信仰があったとの伝承が紹介された。

雪で倒壊した祠は、住民や観光関係団体の協力によって再建され、由来を伝える看板の準備も進められているとの報告があった。

(11) 地域の歴史を子どもや住民へ伝えること

参加者からは、村内に様々な歴史や文化があるにもかかわらず、住民自身が十分に知らないとの意見が出された。学校教育の中でも、村の歴史や地域の成り立ちを学ぶ機会が少なく、村外へ出た際に、自分の地域について聞かれても答えられない人が多いのではないかと指摘があった。

地域の歴史を学ぶことは、子どもを村へと定めるためではなく、自分が育った場所への理解と誇りを持つために重要である。

文字だけの資料では読みづらい場合もあるため、漫画、動画、イラスト、デジタルマップ等を活用してはどうかとの提案が出された。

歴史を観光資源として利用するだけでなく、住民自身が自分たちの地域を理解し、来訪者へ説明できるようにすることが重要である。

(12) より多くの人が参加できる対話と行政の伴走

今回の対話について、参加者からは、参加人数が少なく、この場の意見だけを地区全体の意見とすることは難しいとの指摘があった。回覧等で案内文を一度配布するだけでは、若い世代、事業者、地域活動との接点が少ない人等の参加につながりにくい。

防災行政無線、SNS、事業所への案内、個別の声掛け、家族や知人からの紹介等、複数の方法で参加を呼び掛ける必要がある。会議形式だけでなく、祭り、食事、体験活動、お茶飲み等と組み合わせ、参加しやすく、少し楽しい場にすることも考えられる。

行政には、地域からの提案に対して、管理や責任上の課題だけを示すのではなく、レンタル、リース、民間事業者との連携等、別の実現方法を住民と一緒に考える役割が求められている。

一方で、すべてを行政が行うことはできない。住民、事業者、行政、関係機関が、それぞれにできることと担えないことを整理し、役割を分担する必要がある。

一度の対話で結論を出すのではなく、今回出された意見を地区へ返し、次回はより多様な人が参加できるようにすることが求められている。

行政からも、何を検討し、何を実施するのか、実施できない場合は何が課題となるのかを継続して伝える必要がある。

4 総合振興計画への反映に向けた視点

- ・子ども、世帯、宿泊事業者の減少を踏まえた集落維持の検討
- ・帰郷者、移住者、地域で活動したい人を受け入れる環境づくり

- ・観光、宿泊、飲食、物販、施設管理等を組み合わせた仕事づくり
- ・若い世代が参加しやすい地域活動の日程、役割、方法の見直し
- ・外国人住民を含む多様な人が地域活動へ参加できる環境づくり
- ・公共交通、地域内送迎、移動販売、宅配等を組み合わせた生活支援
- ・観光客を通過させず、滞在、消費、宿泊、再訪へつなげる取組
- ・地域で訪問目的となる食、商品、体験等の育成
- ・磐梯山等の眺望を生かす景観地点の確認と整備
- ・電柱の安全確認と、電柱・電線が景観へ与える影響への対応
- ・グリーンフィールド蛇平の利用方法、申込先、利用条件等の情報公開
- ・グリーンフィールド蛇平の利用制限の確認と、活用案を募集する仕組み
- ・スポーツ合宿、キャンプ、ドッグラン、地域行事等への活用検討
- ・猿による農作物被害、熊による生活・観光への影響への対策
- ・自然公園の保全と安全な観光利用を両立する管理体制
- ・草刈り、除雪等を担う人材の確保と安全講習の実施
- ・住民主体の環境整備へ機械、資材、制度等を提供する支援
- ・外国人住民や観光客も参加できる地域行事の検討
- ・参詣道、不動滝、石碑、鳥居、神社等の歴史文化資源の調査
- ・若者、事業者、外国人住民等へ直接届く対話・情報発信
- ・住民意見の検討状況、実施可否、結果を継続的に伝える仕組み

5 まとめ

今回の対話では、蛇平・秋元・小野川地区において、子ども、世帯、宿泊事業者等が大幅に減少し、買い物、祭り、草刈り、除雪等、これまで地域内の人のつながりによって維持されてきた暮らしを、従来どおり続けるこ

とが難しくなっている現状が共有された。

一方で、地区には、豊かな自然、夏の涼しさ、磐梯山を望む景観、観光地へ向かう人の流れ、グリーンフィールド蛇平等の既存施設、祭り、食文化、古くからの参詣道、小野川不動滝等、多様な資源がある。

課題は、地域に何も無いことではなく、現在ある資源が十分に活用されず、その利用方法や魅力が住民や来訪者へ伝わっていないことである。

観光については、通過する人をさらに増やすだけでなく、地区内で立ち止まり、食べ、買い、体験し、宿泊し、地域の人と関わってもらう必要がある。

そのためには、飲食・物販・案内等の立ち寄り拠点、グリーンフィールド蛇平等の既存施設、磐梯山の景観、地域の食や歴史等を組み合わせ、地区を訪れる明確な目的をつくることが重要である。

買い物や移動については、現在の近隣住民の善意に頼るだけでは、今後の生活を支えることは難しい。移動販売、公共交通、地域内送迎等を組み合わせ、事故時の責任や保険を含めた持続可能な仕組みへ変える必要がある。

地域活動については、若い人が全くいないのではなく、仕事、休日、地域との接点等の問題により、参加にながっていない面がある。従来の方法への参加を求めるだけでなく、現在の働き方や暮らしに合う形へ活動を見直す必要がある。

また、外国人住民、帰郷者、移住者、観光客等も、地域との関わりを持つことのできる重要な存在である。祭りや地域活動を、異なる人が互いを知り、地域とのつながりをつくる機会として再設計することが求められている。

草刈りや除雪については、住民だけ、行政だけのいずれかへ負担を集中させるのではなく、住民が作業へ参加し、行政が安全、機械、制度、関係機関との調整を支える役割分担が必要である。

地域の食文化、参詣道、不動滝、祭りや花火に込められた意味等については、住民の記憶や資料が失われる前に調査・記録し、子どもや来訪者にも分かる形で伝える必要がある。

今回の参加者は限られているため、この内容を地区全体の総意とすることはできない。今後、若い世代、事

業者、外国人住民等を含む、より多様な人が参加できる形で対話を継続する必要がある。

蛇平・秋元・小野川地区の自然、暮らし、施設、文化、人のつながりを次の世代へ引き継ぐためには、現在あるものを整理して使える状態に整え、住民、事業者、行政、関係機関がそれぞれの役割を持ち寄りながら、実行可能な取組から進めることが重要である。

以上